

# 「気になる学生」の指導のための情報共有システムの試案 A Proposal for Information Sharing System for Guiding “Worrisome Students”

山下 晋\* ・ 野村 安子\*\* ・ 藤井 暖子\*\*\*  
YAMASHITA Susumu, NOMURA Yasuko, Fujii Yasuko

## 要 旨：

本研究の目的は、本学の休学・退学の状況を明らかにし、教職員が一体となり、学生が入学から卒業、就職に至るまで十分に学ぶことができるための、支援の体制について検討することを目的にした。

その結果、休学・退学の状況は必ずしもGPA（成績）から説明ができるものではなく、学生自身の性格傾向やコミュニケーション能力、友人や教職員との人間関係、家庭的な問題など多くの要素が複雑に関与していることが明らかとなった。それらを教職員が把握し、適切な支援を行う必要があることが考えられた。そのため、学生についての情報収集からケースカンファレンス、定期的なフォローをするための、教職員の組織をつないだ「学生相談センター」の設置など、早急に実効性のある制度を作り上げ、全学をあげて教職員一丸となった取り組みが必要であると考えられた。

## Abstract

Based on the fact-finding of those students of this university who are taking a long absence or have withdrawn, this paper proposes a system for students to study from their enrollment to graduation and employment. Absence and withdrawal are caused by many factors, such as their characters, communication ability, human relationship and family affairs, not always by GPA. Accordingly, the faculty members should grasp these factors and follow up the target students.

キーワード：気になる学生、休学・退学、情報共有

Keyword: Worrisome students, absence and withdrawal, information sharing

## I. 緒言

大学生の休退学が大きな問題になっている。文部科学省の発表によると、平成24年度の中途退学者の総数は79,311人（2.65%）、休学者の総数は67,654人（2.3%）であった。中途対学・休学の最大の要因として「経済的理由」があげられている。経済的な理由への対応として、独立行政法人日本学生支援機構の大学等奨学金事業、国立大学、私立大学の授業料減免などの充実が行われている<sup>1)</sup>。その他の要因である「学業不振」の対応として、各大学では新入生を対象とする総合教育プロ

グラム（初年次教育）を推進したり、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学（以下：本学）においても、学修支援センターが学修のサポートを行っている。

また、「学校生活不適応」への対応として、本学では、保健管理センター及び保健室において、学生の心と体の健康問題に対応できるカウンセラー（臨床心理士）を配置し支援を行っている。

しかし、大学、短大における保育者養成は、新制度からさらに教育・保育の質の高度化が求められていることから、学生が抱える問題は今後さらに複雑になってくること、一方で、大学組織の中

\*岡崎女子短期大学幼児教育学科      \*\*岡崎女子大学・岡崎女子短期大学進路支援課

\*\*\*岡崎女子大学・岡崎女子短期大学学生支援課

ではそれに対応する担当部署も分化されていることから、学生の状況を把握しきれなかったり、把握しても適切な支援を行うことができない場合も起こりうるということが予想される。

そこで、本研究は本学の学生の状況を把握し、教員（授業）、職員（入試、教務、学生支援、進路支援）が一体となり、学生が入口（入学）から出口（卒業・就職）に至るまで学ぶことができるために、十分な支援ができる体制とは何かについて検討することを目的にした。

## II. 方法

### 1. 学生の状況調査

学生の状況について、平成21～25年度在学生の休学・退学者数とその割合、平成22～24年度入学生のGPA（Grade Point Average）で区分した休学者数・退学者数、平成23～25年度卒業生のGPAで区分した公務員試験合格者数を算出した。

### 2. 平成26年度第2回FD・SD合同研修会の実施

本学では、定期的にFD・SDの研修会を行っている。平成26年10月1日（水）に、「学生が最後まで学ぶために、教職員は何ができるか？」をテーマに、学生支援課の藤井暖子課長補佐より「岡崎女子短期大学の休学・退学の実態」、岡崎女子大学の白垣潤准教授より「FDについて」講話をいただき、その後、「気になる学生に対して、どのような支援ができるか」について、グループワークを行い、その結果を集約した。

## III. 結果及び考察

### 1. 学生の状況調査

平成21年～25年度の休学者数、退学者数について図1、2に示した。

岡崎女子短期大学幼児教育学科第一部（以下：第一部）の休学者は、平成21年度から11名（2.4%）、6名（1.3%）、7名（1.4%）、7名（1.4%）、9名（2.0%）、であり、幼児教育学科第三部（以下：第三部）の休学者は、平成21年度から19名（8.6%）、12名（5.2%）、19名（8.0%）、15名（5.9%）、14名（5.2%）であった。

第一部の退学者は、平成21年度から13名（2.8

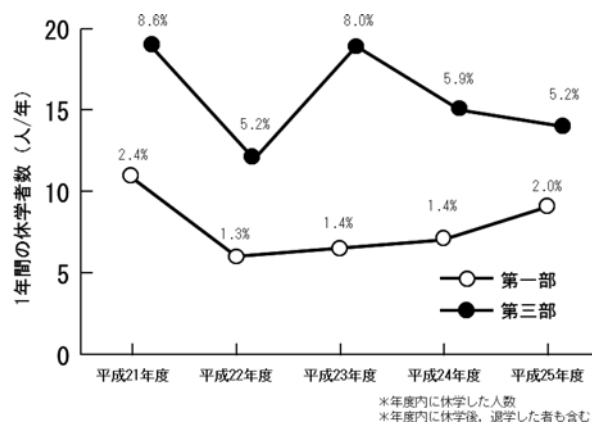


図1 幼児教育学科の休学者の推移

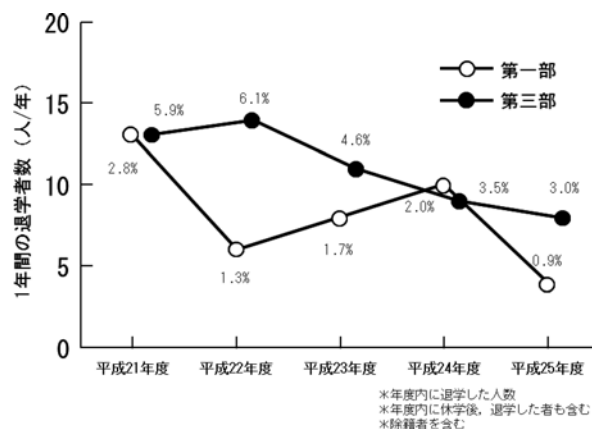


図2 幼児教育学科の退学者の推移

%)、6名（1.3%）、8名（1.7%）、10名（2.0%）、4名（0.9%）、であり、第三部の退学者は、平成21年度から13名（5.9%）、14名（6.1%）、11名（4.6%）、9名（3.5%）、8名（3.0%）であった。

休学や退学をする学生の割合は、調査期間の5年間において、いずれも第三部の方が多かった。この原因として、経済的な理由が背景として、第三部は授業料が第一部に比べ安いものの、学生の中には自身のアルバイトで稼いだ賃金を授業料に充てているケースもあり、そのため、アルバイトが忙しくなることで学業がおろそかになったことが考えられる。また、入学前に思い描いていた「理想」と大学での学びという「現実」に大きな差があったことも要因の1つと考えられる。特に、三部は半日のみの授業であり、自分のペースでできると思っていたものの、各授業で出される課題や実習など予想以上に大変であったことなどが推察された。

平成22～24年度に第一部、第三部に入学した

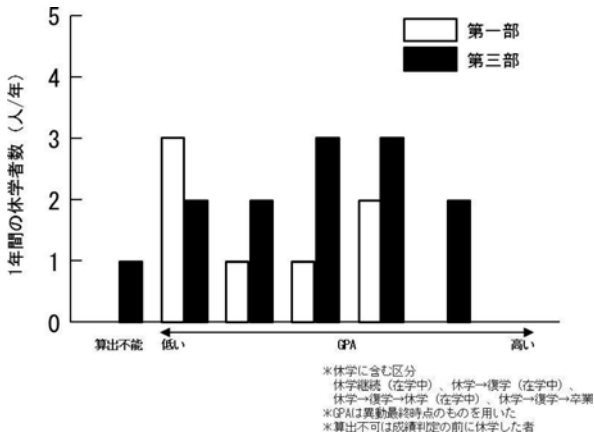


図3 GPA階級別に比較した幼児教育学科の休学者数

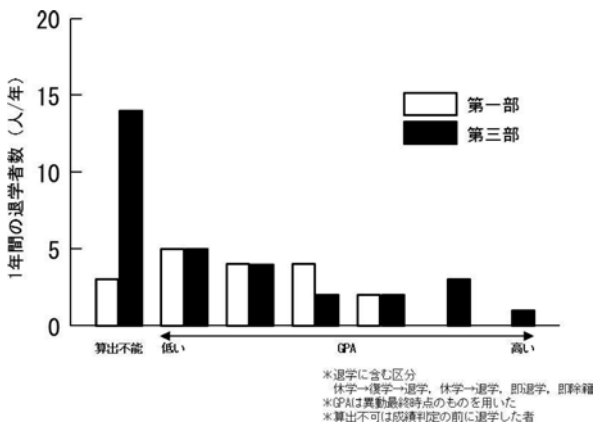


図4 GPA階級別に比較した幼児教育学科の退学者数

学生のうち、休学または退学した学生の人数をGPAの階級別に比較した結果を図3、4に示した。

第一部の休学者は、GPAが中位から下位の階級の学生に見られ、そのうち最も低い階級が最多で3名であった。第三部では、全ての階級において休学者が見られた。

次に、退学者について、第一部では中位から下位の階級の学生に見られ、第三部では全ての階級の学生に見られた。第一部・第三部とも、そのうち最も低い階級が最多で5名であった。特に、第三部において、成績判定の前に退学をした学生が多かったため、算出不能が14名という結果であった。

学生支援課の調べによると、休学した学生の中には、進路再考や語学留学という理由が見られた。また、退学をした学生の中には、進路変更を理由にする者が多かった。例えば、熱心に勉強していたが、他のことに興味を抱いて進路変更した者がいた。一方で、幼児教育に特に関心があったわけではなかったものの、高校の教員や保護者に

大学進学を勧められたり、「大人より子どもを対象にした仕事がいい」と安易に考えて入学してきた学生や保育職を目指していたものの、学外実習などでつまづいたために保育職に向いていないと感じて進路変更を行った者もいた。

この背景には、入学段階でのミスマッチがあると考えられる。保育者をイメージでとらえており、実際に保育者の仕事内容はどのようなものか、保育者になるためにはどのような勉強をし、どの程度の実習をするかなど理解せず入学をしてきていると推測される。

このため、入学前の学生募集の段階で、本人や保護者・高校の教員に対し、保育者の仕事や保育者になるための学習内容について、学校案内やホームページ、ガイダンスやオープンキャンパス、高校訪問の機会を利用し、十分な説明をすることにより、休学・退学者を減少させることが可能と考えられる。

GPAの階級別に比較した公務員試験の合格者数を表1に示した。

表1 GPA階級別に比較した公務員試験合格者数

GPA	第一部		第三部	
	学生数	合格者	学生数	合格者
高い	35人	23人 (65.7%)	11人	3人 (27.3%)
	258人	79人 (30.6%)	33人	8人 (24.2%)
	302人	54人 (17.9%)	52人	1人 (1.9%)
	89人	7人 (7.9%)	38人	1人 (1.9%)
	21人	1人 (4.8%)	13人	0人 (0.0%)
低い	2人	0人 (0.0%)	1人	0人 (0.0%)
合計	707人	164人 (23.2%)	148人	13人 (8.8%)

\*第一部は平成23～25年度の卒業生、第三部は平成24年～25年度の卒業生の最終時点のGPAを用いた。

第一部・第三部ともGPAが高い階級の群では、公務員試験の合格率が高いという結果であった。また、いずれのGPAの階級においても、第三部の方が第一部に比べ、公務員試験の合格率が低かった。この原因として、近年、第三部の学生における就職先に対する思いが多様化しており、学生の多くが公務員になりたいと思っているわけではない状況にある。保育職のなかでも託児所を希望

したり、その他の企業に就職を希望する学生の増加に伴って、愛知私立幼稚園連盟の愛知県私立幼稚園教員採用候補者第一次統一試験の受験者も減少傾向になっている。

本学の公務員試験の対策講座が5限目に開催されていること、毎年2～3月（春休み期間）も講座が行われるため、公務員を目指すための講座に出席するとアルバイトをすることができなくなることが原因である。また、時間割に空きがなく、就職に関するガイダンスを開く場所がないことも関係しているため、この対策として、キャリア支援に関するコマの開講などの手だてが必要である。

以上の結果から、GPAが高い学生は公務員試験の合格率が高いものの、休学・退学の状況は必ずしもGPAの関係が明らかにはならなかった。つまり、学生の動向には、成績以外に、学生自身の性格傾向やコミュニケーション能力、友人や教職員との人間関係、家庭的な問題など多くの要素

が複雑に関与しており、それらを教職員が把握し、適切な支援を行う必要があることが考えられた。

## 2. FD・SD合同研修会

平成26年度第2回FD・SD合同研修会において、「気になる学生に対して、どのような支援ができるか」について、グループワークを行った。そこで得られた結果レポートを集約し、今後の指導における資料とするために表2にまとめた。

### (1) 気になる学生に対する支援の現状と課題

①現在、本学では欠席調査（欠席回数3回、5回で報告）を実施している。

→授業担当教員やクラス担任により取り組み方が異なり、教員によって温度差が発生している。

②学科会議（月1回開催）では、特に目立つ学生の状況は報告し合っている。

→「少し気になる段階」の学生については、

表2 気になる学生の様子と予想される背景

気になる学生の様子		予想される背景
休退学	<ul style="list-style-type: none"> <li>・休学を繰り返す</li> <li>・学費を滞納している</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・経済的な理由</li> <li>・入学に対するモチベーションが低い →入学後に厳しい現実を体験し、心を病む</li> <li>・専門性と本人が合致していない</li> </ul>
学業	<ul style="list-style-type: none"> <li>・成績が芳しくない →授業態度がよい学生の成績が悪い実態もある</li> <li>・遅刻、欠席、授業中の退席が多い</li> <li>・課題の提出状況が悪い（遅延、未提出）</li> <li>・講義よりも実習指導等の個別指導において気になる</li> <li>・授業中に質問ができない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活リズムが乱れている</li> <li>・アルバイトばかりしている</li> <li>・目標を失っている</li> <li>・学力が不足している</li> <li>・学業に熱意を欠いている</li> <li>・授業がつまらなく感じる →教える側の問題もある</li> </ul>
性格傾向	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会性がない →友好関係が築けない、人間関係に問題が感じられる</li> <li>・攻撃的な態度に出るなど、態度が悪い</li> <li>・心が折れやすい（就職活動で失敗すると立ち直れない）</li> <li>・自分でやるべきことの課題が見つけられない</li> <li>・授業が終わっても教室に一人で居残り、何かに没頭している</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人間関係の体験が希薄</li> <li>・成功体験や失敗体験が乏しい</li> <li>・自己肯定感が低い</li> <li>・他者に対する依存心が強い</li> <li>・発達特性やパーソナリティの問題</li> </ul>
コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーション能力が低く、対人関係に問題がある</li> <li>・教職員の挨拶や話に応えない</li> <li>・窓口での反応が薄かったり、無反応である</li> <li>・教員と目が合わない、合わせようとならない</li> <li>・学生同士のグループ活動に消極的（グループになれない）</li> <li>・クラスで孤立している →授業、食事など常に一人で行動している →声をかけて欲しいのか、友人に誘ってほしいのかは不明</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会経験や知識の不足</li> <li>・発達特性やパーソナリティの問題 →物静かな性格で友人と交われない</li> <li>・家庭の影響 →保護者もコミュニケーションをとることが苦手な様子であった</li> <li>・携帯電話・スマートフォンへの依存性</li> </ul>
生活態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育者を目指す者としての身だしなみとして相応しくない →服装や髪形が派手で奇抜、または清潔感がない</li> <li>・生活指導が必要である（中学・高校レベル） →成績面以外の部分で資格、免許を与えるに値するか悩ましい</li> <li>・社会的常識、規範意識がない</li> <li>・同じことを何度言っても改善しない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・規範意識が薄い</li> <li>・社会経験や知識の不足</li> <li>・家庭状況に問題がある →これらは本人、家庭、本人と家庭の混合型に分類され、対応が異なる</li> </ul>



個別での把握・対応にとどまっている。

③学修支援センターでは、学習支援が必要な学生について、授業担当者等にも協力を仰ぎ、個別に支援をしている。また、保健室では、精神面、家庭環境などをカウンセラーに相談する機会を設けている。

→学生が来ない(来ることができない)うえ、単独の部署では限界があり、十分なフォローできていない。

これらのことから、複数の授業担当者から少しでも気になる学生の状況(欠席状況、授業態度)を報告し合うとよいと考えられる。また、休学者は休学を繰り返す傾向にあり、本学の短期大学において、休学後に退学した学生の割合は幼児教育学科第一部70%、同三部56%となっている。休学した学生が復学し、卒業できるためには「復学生の居場所づくり」が課題であろう。この点も含めて、学生を支援する部署(保健室や学修支援センター)について、ガイダンスやクラスミーティングなどで、その機能を紹介し、相談に行きやすい環境を整える必要が感じられた。

(2) 気になる学生に対する支援のあり方

次に、グループワークで得られた報告を参考に、気になる学生の支援の現状と課題、支援のあり方をまとめた。

①各グループからは「気になる学生に対し、日々の挨拶を含め、声をかけるなど個別対応をしている」ということが多く挙げられた。また、その際のポイントとして、次の3点が挙げられた。

- ・学生一人一人の話をよく聞き、生活の様子、自身の能力をよく見極める。
- ・学生から虐待やリストカットなど、個人的な状況を告白されることがあることから、必要があれば、過去にさかのぼった話を聞く。
- ・必要があれば、保護者や保証人に連絡を取る。

②十分な支援をすることができない学生側の問題点

- ・学生が何らかの問題を抱えていても自ら相談できない原因の1つに、学生自身が個別対応に慣れてしまっており、教職員から声を掛けられるのを待っているのではないか。

→個別対応に加え、学生が安心して主体的に動けるような環境作りを行う必要が感じられた。

③十分な支援をすることができない教職員側の問題点

- ・学生がどのくらい悩んでいるのかについて、誰が判断すべきか、また、その基準が不明である。

→授業後すぐに退出する学生は気になるか?

- ・特に家庭の問題に関する支援は、どのように(方法)どこまで(程度)行うのかは明らかではない。

- ・特に女子学生なので、男性職員は対応が難しいと感じる。

現在、「気になる学生」の判断は、出欠席状況、成績などの客観的な視点と、教職員の主観的な視点によって行われている。主観的な視点では、教員の個人差が大きくなるため、幼児教育学科ディプロマ・ポリシーなどから簡易な判定表を作成して、複数の教職員で判断するという手法ができると思われる(表3)。

表3 幼児教育学科ディプロマポリシーを基準とした学生の学習状況の調査票(第一部用)

学位授与方針(ディプロマ・ポリシー)	評 価				
	5	4	3	2	1
① 社会で求められる基本的な教養と自ら考え学び続ける態度を醸成している。					
② 保育人として他者への共感力と豊かなコミュニケーション能力を醸成している。					
③ 保育人に求められる専門的知識・技能・実践力を醸成し、その社会的使命・責任を理解している。					
④ 子どもを理解し、子どもの「願い」や「夢中」を引き出す豊かな感性や表現力を醸成している。					
⑤ 現代社会の保育ニーズの把握に努め、社会・地域に貢献できる力を醸成している。					

※「あまりできていない」、「全くできていない」学生には支援・指導をするような体制をつくる

一方で、支援・指導方法については、確固たるルール決めは難しく、ケース・バイ・ケースで対応しなくてはならない。例えば、授業についていけない理由を明確にし、対応していくべきである。現在は、担任やゼミ(子どもの研究Ⅰ)担当が指導にあたっているが、学生(保護者も含めて)とコミュニケーションをとり、適切な支援や指導をするためにも教員、職員の様々な角度や視点が必要となる。また、進路の指導方針や休学・退学に対する指導方針等は学生の出席の状況や授業態度、進路希望、家庭の状況など多方面の情報から、学生の利益を最大限に考えた判断(指導)をしなくてはならない。

### (3) 学生の情報の共有システムの構築

先述の(1)(2)から、教職員によって、「気になる学生」に対する支援は異なること、一教職員では、「気になる学生」に対する支援は限界があることが明らかとなった。また、授業や窓口、保健室などで学生に対して何らかの違和感を抱いても、情報を集約する場所がなく、情報の共有範囲はすべて個人の判断にゆだねられているということが課題である。

そこで、現段階で考えうる支援策として、学生の情報の共有システム(学生相談センター:仮称)を構築し、手順に基づき、学生一人一人に合わせた対応をするという試案をまとめた。

#### 【手順】

- (ア) 学生の相談を受ける(内容に合致した相談窓口があることが望ましい)
- (イ) 各部署から全体の情報を収集する
- (ウ) 関係者(授業担当者、担任など)を招集し、チームを作成する
- (エ) ケースカンファレンス(個別指導方針作成)を実施する
- (オ) 実施後、定期的なフォローをする。

学生相談センターとは、学修支援センターが中心となり、教員と職員間の組織をつなぐシステムである。学生に関する情報を集約し、また相互に持っている情報を学生のために活用するうえで意義深いものとする。このシステムでは、話を聞く相手が教員であると、評価に係わってくるため、本心を読み取ることができなくなる可能性があることから、学生が話しやすく、学生との信頼関係を築き、学生に寄り添い、状況を正しく判断できるスタッフの育成が必要となる。また、学生の情報共有が教職員間で噂話のように話されることがないように、教職員のモラル形成も必要であ

る。学生相談センターに相談に来る学生と休退学者の因果関係が明らかになると、早期に対応することができると思われる。

## IV. まとめ

本研究は、本学の学生の休学・退学の状況を明らかにし、どのような支援体制を構築することができるか、検討することを目的とした。その結果、休学・退学の状況をGPAのみで説明することはできず、学生自身の性格傾向やコミュニケーション能力、友人関係、家庭的な問題などが関与していることが考えられた。

また、本学の学生の休学者や退学者を少しでも減らし、人間力、専門力、社会貢献力を獲得させようとするのであれば、学生の状況についてより深い分析を行い、早急に実効性のある制度を作り上げるなど、全学をあげて教職員一丸となった取り組みが必要である。

## 謝辞

本研究の実施に当たり、岡崎女子大学、岡崎女子短期大学FD委員長はじめ委員皆様、グループワークにて貴重なご意見をいただきました教職員の皆様に深く感謝いたします。

なお、本論文の執筆に際しては、個人情報の保護に留意し、学内情報の取り扱いについても岡崎女子短期大学の確認と承認を得ております。

## 引用参考

- 1) 学生の中途退学や休学等の状況について、文部科学省報道発表(平成26年9月25日)